



Yokohama City University Exploration Club  
Since 1956





Noel.K / Suguru.O / Yoshiki.M

Projected by Exploration Club of Yokohama City Univ.

Produced by Members of YCWV

Dec.15.2018

# ALASKA REPORT 2018

The Daily

Authors: Noel Komatsu, Suguru Okada, Yoshiki Matsumoto

Projected by Exploration Club of Yokohama City Univ.

Produced by Members of YCWV

Project Terms: From Aug.31.2018 To Sep.8.2018

## 1.はじめに

この文章は、2018年夏に行われた、アラスカ自転車縦断計画に参加した小松、岡田、松本の3名がアラスカを振り返り、編集したアラスカ日誌である。また、アラスカでの出来事について担当を割り振り、それぞれ思いおもいに書き記してもらったものである。編集者の私（小松）が無理を言って、期限を取り決め、原稿の回収をお願いすることが多々あった。（いや、それしかなかったのだが。）それに対して、岡田、松本の両名は忙しいスケジュールの合間を縫って、素晴らしい文章を記してくれたことに、編集者として感謝申し上げる。（ただ、忙しいのもわかるが、締め切りという概念の存在についても気づいて欲しかったのだが。）

## 2.日誌

次頁より、2018年8月31日から2018年9月8日における日誌を掲載した。

<sup>1</sup> アラスカ自転車縦断計画：2018年8月31日から2018年9月10日にかけて行われた横浜国立大学探検部の公式海外遠征活動の一つ。参加者は、小松伸栄留（理学系2年）、松本芳輝（国際都市学系2年）、岡田優（国際教養学系2年）の3名であった。アラスカ滞在後、岡田はゼミのためフィンランドへ向かい、小松、松本の両名はマリナーズの試合観戦のためシアトルへと向かった。この計画の目的は、自転車でのアラスカの縦断であったが、様々なトラブルに見舞われ、レンタカーなど他の交通手段を駆使してアラスカを縦断した。出発地：アラスカ州アンカレッジ市、主な経由地：アラスカ州デナリ国立公園、フェアバンクス市、最終目的地：アラスカ州コールドフット村（北極圏内に位置し、定住人口は僅か14人、2018年現在。）蛇足であるが、小松、岡田、松本の3名全員、横浜市立大学ワンダーフォーゲル同好会（YCWV）に所属し、山をこよなく愛していることを付け加えておく。

<sup>2</sup> 割り振りについて：8/31小松、9/1小松、9/2岡田、9/3岡田、9/4松本、9/5松本、9/6小松、9/7岡田、9/8小松。以上のように分担し、それぞれ書き記した。岡田はフィンランドでのゼミのため、9/7にアラスカを旅立った。小松、松本両名は9/9までアラスカに滞在し、その後野球観戦、スターバックスに立ち寄るためシアトルに向かった。そこで、8/31から9/8までのアラスカ滞在記を記した。

<sup>3</sup> このAlaska Report 2018 The Dailyは、日誌のみに特化し、編集したものである。そのほかの探検の目的や方法、さらに現地での移動ルートなどの資料については別紙にてまとめた。また、このアラスカ自転車縦断計画は、岡田によって映像として記録化された。

October.31 / 8月31日

まあ、これは30日の朝にあたるのであるが、僕は成田空港にいた。成田10:45発のデルタ航空1957便ポートランド行きに搭乗する準備をしていた。準備といっても、横浜を朝早く出て頭が何も働いていなかったの、スタバでコーヒーを注文し、のんびり時間を過ごしていた。本当は、松本とともにチェックインをして、WiFiや両替やらを一緒にしようと考えていたのであるが、松本の予約した便は、成田出発ではなく、羽田出発だったのだ。それを僕が知ったのは、9時を回ったことであつた。なかなか連絡をよこさない松本に痺れを切らし電話をしたところ発覚したのであつた。松本自身も、羽田だと気付いたのは、上大岡駅過ぎてからだったとのこと、不幸中の幸いであつた。そんな前置きはさておき、とりあえず時間がきたので飛行機に乗り込んだ。映画を見て、寝て、食事が出てを二回繰り返して、現地時間30日の朝9時過ぎにポートランド国際空港に到着した。

その後、シアトルを経由し、目的地のアンカレッジ・テッドステイブン国際空港に到着したのは31日の早朝2時であつた。なかなかの長旅であつた。そして、空港の到着ロビーで松本と合流した。松本が日本から運んできた自転車を包むダンボールの解体作業がアラスカにきて一番はじめの仕事だとは思ひもなかった。これが意外にも重労働なのであつた。その後、まともなスタバに行き、カロリーたっぷりのフラベチーノとバター、チーズたっぷりのベーグルを早朝からたிரらげてしまった。（実は、デルタ航空の機内サービスのコーヒーもスタバが提携していたのだ。何回スタバのコーヒーを飲むのだろうかと数え始めた。）

辺りが明るくなり始めたので、空港から市内に移動することとした。岡田との集合場所であるアラスカ鉄道アンカレッジ駅に着いたのは、31日の朝7時ごろであつた。フェアバンクスからアンカレッジへと戻るときの鉄道チケットを購入した。そして、9時過ぎ、岡田と合流した。岡田、松本の両名は日本から自転車を持参したのだが、僕は運ぶのが面倒だったので、現地で借りることにしていた。そこで、自転車のレンタルに向かった。アンカレッジ中心部の4番通りにあるDOWNTOWN BICYCLE RENTAL Anchorage Alaskaに向かった。ここのスタッフの兄ちゃんは陽気で、話していくうちに意気投合し、僕は調子に乗って、成田で買った限定版のブラックサンダーをプレゼントした。めちゃくちゃ喜んでくれて嬉しかった。

その後、アラスカの原住民族を知れる民族文化センターを訪れた。ここで、鹿のシチューを昼食とする予定であつたが、売られていなかった。そこで、ハンバーガー

と再びベーグルが昼食となった。やはりベーグルにはたっぷりのバターとチーズがついてきた。原住民の遊びや、生活環などの展示を見回し、市内に戻った。

この民族文化センターが郊外にあることから無料の循環バスで移動し、自転車は市内中心部のアンカレッジ美術館の駐輪場に置いてきた。もちろん施錠を行ってである。しかし、駐輪場には2台の自転車しかなかった。一人の自転車が盗まれたのである。この状況をすぐに飲み込めなかった。松本の自転車が盗まれていたのだ。とりあえず、警備員を呼んだ。

その後、警察に被害届を出すことになった。警察署はアンカレッジ市街から少し離れた郊外にあったので、再びバスに乗り向かった。警察署では、松本の渾身の英語を聞くことができた。なかなか味のある英語を話していた。一通りの事務作業が終了し、夕方となり、ホテルに向かうことになった。道中、ハンバーガーショップで少し早めの昼食をとった。また、ハンバーガーである。

ホテルでは、日本語の堪能なフロントの方の暖かい出迎えを受けた。アラスカに着き、激動の1日が終わろうとしていた。松本の自転車がすぐには戻らない（おそらく決して戻ることはない）とのことで、昼に訪れた自転車屋（DOWNTOWN BICYCLE RENTAL Anchorage Alaska）に再び向かい、自転車をもう一台借り直した。その際、自転車の店主（通称：ペダおじ、身に着けていたTシャツにペダルが描かれていたことに由来する、松本曰く。）にフェアバンクスまでの詳しい自転車道の進み方や、道中の観光スポットなどを事細かに教えてくださった。本当に、暖かい人と冷たい人の温度差が激しい街だと思った。

明日は朝7時には出発しないとけないとのことで、この日は10時過ぎごろには皆、床についた。

文責：小松

## SEPTEMBER.1 / 9月1日

朝食をホテルのレストランで済ませた。アメリカンブレイクファーストで簡素であるが、オーガニックかつ健康的な内容であった。ベリー（ブルーベリー、ブラックベリー、ストロベリーなど）やパイナップル、グレープなどの新鮮な果物が並び、ヨーグルトや蜂蜜、マフィンなどがあった。昨夜の夕食が少し早かったこともあり、お代わりを2回もしてしまった。（まあ、いつものことであるが。）そして、部屋に戻り、出発の準備に取り掛かった。今日から、自転車旅が本格的に始動する日である。毎日100数キロ移動するのである。

「もう10時だよ」松本が声をあげた。この日は、7時に出ないとまずいと昨夜の会議の結果であった。それにもかかわらず、僕は悠長に支度をし、特に岡田はTシャツに地図を描き、撮影の小道具づくりなどしていた。なかなか前途多難な旅である。日本語の流暢なフロントの方とお別れし、ホテルを出発した。午前10時を回っていた。

6番街を北へ進み、アラスカ鉄道アンカレッジ駅を抜け、郊外へと向かった。途中から、ハイウェイ沿いの自転車道となり、より走りやすくなった。その後、アラスカハイウェイとグレンハイウェイの分岐点である「イーグルリバー」という小さな街に立ち寄った。ここで昼食をとった。またもやハンバーガーである。マクドナルドである。世界中どこに行っても、黄色のm字は目立つものである。ここで、今日の最終目的地が決定した。「ワシラ」である。ワシラは、アラスカ鉄道のフェアバンクスへ向かう路線の最初の駅がある街である。

ワシラについたのは、午後8時ごろであった。アンカレッジから90kmほど走った。予約していた宿へ向かった。予約した部屋が改修中とのことで、違うコテージに向かうようにとの連絡を受けたが、なかなかコミュニケーションが思うように取れなかった。結局、コテージは見つからず、夕食を取ることにした。またハンバーガーである。今度はKFCだ。フライドチキンは、やっぱり美味かった。帰り際、店員さんが僕らを気遣って、泊まる場所あるのかなど聞いてくれた。アラスカの方達は優しい方が多いなと思った。

外に出ると日が沈んでいた。緯度が高いと言えども、午後10時近かった。宿探しを再開した。数件のモーテルやホテルを回った。しかし、どこも満室とのことであった。午後11時、僕はマクドナルド前にいた。ここで、朝を迎えようとした。しか

し、24時間営業だと表記されていたのは、イートインスペースではなくドライブスルーの方であった。イートインは11時に閉まった。

野宿。この言葉が頭に浮かんだ。そして、現実となった。氷点下になるかならないかくらいの気温で、ホームレスが街を徘徊している。そんな状況下で僕らは野宿をした。アラスカ鉄道ワシラ駅のプラットホームのベンチである。屋根はかろうじてあるが、風は全く防げない。僕たちは、自転車の輸行用の袋の中に包まって寝ることとした。

ただベンチは三人全員が横になれるほどのスペースはなかった。岡田が横になった。僕と松本は横になれず、座ったまま夜を明かした。寒さで目が何回も冷め、本当にやばいと思った。そして、隣で松本が言った。「あと数時間で終わるでしょ」と。さすが、松本だと思った。確かに、数時間すればこの寒さからとりあえず解放されると思った。ただ体は正直である。僕は12時、コーヒーを買いに駅の近くにあるコンビニへ向かった。3時間おきくらいにコンビニに向かった。こんなことをして夜を明かすなど思いもしなかった。

文責：小松

## SEPTEMBER.2 / 9月2日

アラスカ3日目の朝、2018年9月2日。朝の4時頃に目を覚ます。寒さのあまり身体が動かない。しかし何とか夜を越せたのだという思いもほんの少しだけあった。なんとか起き上がり駅のホームをグルグルグルグル走り回りながら身体を温める。2人は近くのコンビニからコーヒーとホットチョコを買ってきてくれた。だが露骨に不機嫌である。

学研の「科学と学習」に付録でついてきたチンケな温度計を見る。2度である。再び身体が凍り付いた。二人はずっと起きていたようである。私がベンチを占領したせいだと後々彼らは私をののしった（が、私は許可は取ったのだ！この場を借りて声を大にして述べたい）。朝6時になったら昨日入れなかったマックがやっと開店し、暖かい店内に入ることが出来る。我々はただひたすらにその時を待った。

野宿後の朝日ほど美しいものは無い。高校生時代に地元北海道で野宿した記憶がよみがえる。希望の朝だ。日が昇り、スタンド・バイ・ミーさながらの情景、どこまでも続く線路が太陽の下に現れる。せっかくなのでオマージュ写真を撮り、ついでにカンナムスタイルの物まねをする(?)。Go proの無駄遣いである。

開店とほぼ同時にマックの店内に入り、半寝になりながら今後の予定を立てることにした。私は移動する案を推したが、眠らなかつた二人はありえないと猛反対する。全員体力が限界なのだ。綿密な話し合いの結果、今日はこのWasillaの地に宿を取り、翌日引き返し、改めてレンタカーで出発するという案が採用となった。

そう、この時点で早くも自転車でのフェアバンクス到達は不可能となってしまったのだ。結局我々は100km程度しか移動していないことになる。しかし体力的にも、日程的にもこれ以上の自転車移動はほぼ不可能だ。少なくとも今日一日は休息を取らないと死んでしまう。それに、目的はあくまでも北極点到達である。私は断腸の思いで自転車移動を諦めた。だが、これは二人の冴え渡る英断であったと言うことも、私は今だからこそ付け加えねばならない。

宿を予約し、せっかくなのでWasilla観光としゃれ込もう。そう考えた我々は町の観光案内所や郵便局、図書館を回った。全部休みである。それもそのはず、その日は休日、どのお店も閉まっていたのだ。ましてやアラスカの田舎町である。空いているのはコーヒーを買ったコンビニとスーパー、チェーンの飲食店しかない。我々は思いっきり暇をもてあました。湖がたくさんある町なので、湖を泳ぐカルガモのんびり眺めたりもして、時間を潰した。

昼になり、我々は近々日本にも進出するというパンダ・エクスプレスに立ち寄った。ビュッフェ形式でトレイに料理を取っていく形式の中華レストランである。我々は早くも恋しくなっていた米にありついた。しかしここで極度の眠気が我々を襲う・・・。

目を覚ました。だが二人がいない。理解できない状況に私は面食らった。辺りを見回すと、テーブルの上に一枚の紙切れが置いてある。

「先に行ってます」

突然の怒りが私を襲った！！なぜ私を起こさず先に出る！？なぜ集団行動が必須な海外でこのような暴挙に出る！？どこに行ったのだ！？ポケットWi-Fiを持って行かれては連絡手段が無いというのに！？

とりあえず外に出て停めてある自転車を取りに行く。自転車にもう一枚の紙切れが貼ってあった。

「ウォルマートにいます」

さらなる怒りの猛襲だあ！！何故分割してメッセージを残す！？私に謎解きゲームでもさせるつもりか！？なぜそんな速くへ行ったのだ！？

私は怒り狂ったまま、昨日検索した名残でかろうじて残っていたGoogle Mapを頼りにウォルマートを探し、向かうことにした。

スーパーでは二人がカートを押して平然と買い物をしている。私は一通りの抗議をした後、このまま怒っても更に関係が悪化するだけだと思い直した。嫌でもあと何日も共に過ごすのだ。必死で怒りを押し殺し、一緒に買い物をした。要はのんきにお土産なんかを買うのである。何もかもがピックサイズなここで、今夜の夕食も手に入れた。

後々聞いた話によると、彼らは私が駅のベンチを占領して寝たのが気に入らなかつたらしい。思えばこの時点で既に3人の関係はすさんでいたのだ・・・。

事前に予約していたホテルに3時頃に到着する。部屋にキッチンまで付いているなかなか豪華な宿である。我々は明日の為、早めにここで休むことにした。待ってい

たかのように二人は寝始めた。のえるはいびきがうるさい。私は彼らが単独行動をするならこっちもしてやる、というガキのような反抗でサイクリングに出かけた。

風が心地よい。ウンザリするほど見飽きた二人から離れ、町を見て回るのだ。日が昇ってみると非常に美しい町である。怪しげなおカルト本がたくさん置いてある古本屋に立ち寄り、持ってもいないタロットカードの本を買ったりもした。

文責：岡田

SEPTEMBER.3 / 9月3日

翌日。9月3日。自転車屋のペダルおじさんが薦めてくれた、景色が美しいというPalmerに立ち寄りながらAnchorageまで帰る事となった。よしきと私は自転車で、金持ちののえるは自転車を乗せてアラスカ鉄道で帰ることになった。

まずはWasillaから10km程離れたPalmerへ向かう。ここが中心部かよ？となるくらいのPalmerのSubwayで昼食を取った。携帯電話の店と併設しているおかしな店である。パンのサイズ、セットメニューなど意外と注文が難しい。

近くに大きな川が流れる公園があるというので、見に行くことにした。MTBでアクロバティックにコースを走る子供達を横目に森を抜ける。獣道をかき分けて進み、目の前に現れたのは大きいが決して綺麗では無い川だった。少し期待外れである。広場でよしきがキャッチボールをしようと言い出す。どこでもこれをしたがる野球少年な彼の欲を満たすべく、そこまで運動の得意では無い二人は、彼とキャッチボールをすることにした。ウォルマートで買ったソフトボールは割と手に痛い。楽しいが、痛かった。

一通り遊んだ後、ここでのえると別れ、彼はWasilla駅へ戻り、我々は来たときと別の道を通って帰る事となった。

途中で先ほどの巨大な川にぶつかった。絶景である。大きな橋から雄大な川と、バックの山々を眺める。風船を持った女の子が川辺で遊んでいた。メルヘンな世界である。

ところが、次第に道はどんどん狭くなっていった。自転車道は無くなり、砂利道になる。車がものすごいスピードで真横を駆け抜けてゆく。生きた心地がしない。精神的に疲弊しつつも、我々二人は永遠とも言える道のりをひた走った。

途中にたくさんの廃車と観覧車がある広場があった。廃車の写真を撮っていると、近くの家々の屋根から何かを叫ばれた。ここは銃社会である。撃ち殺される危険を感じた我々はそそくさと逃げた。

日がすっかり暮れて夜10時近く。ようやくAnchorage市街地へ到着。途中浮浪者が住むスラムの地域を抜けた。あらぬ方向を向きながら一人で何かを叫んでいる人々の間をピクピクしながら抜け、ようやくホテルへ着いた。のえるは既に到着して部屋でぬくぬく暖まっていた。我々は空港のレンタカー屋で車を調達し、明日より移動

する事を決めたとこで、ようやく眠りについた。紆余曲折あった自転車旅の終焉である。

文責：岡田

朝、レンタカーを借りる為、空港まで自転車を漕いだ。日本からはるばるアンカレッジ空港に辿り着いたのは、ほんの3日前のことだった。(その時はまだ、僕の自転車も一緒だった。)次に空港を訪れるのはアラスカを離れる時だと思ってきたが、それよりも随分と早く空港に帰ってきてしまったな、と苦笑するしかなかった。

予約しておいたレンタカーはつつがなく受け取ることができた。どんな車が用意されているのかいささか不安だったが、カウンターで渡された鍵に日産のエンブレムを見つけた時、なんだかとてもホッとした。僕がみなとみらいへアルバイトで通っていた時、日産本社を何百回と通っていたが故、妙な愛着が湧いていたからかもしれない。それが2000km超の旅を共にしたアラスカでの相棒、我がニッサン・セントラとの出会いだった。

セントラはセダンタイプの割に車内が広く、3台の自転車を優に積み込むことができた。しかしこの車の旅に自転車は不要である。心苦しく思いながらも先ず僕らが向かったのは、あのダウンタウン・バイクだった。あれだけ親切にしてもらい値段を割り引いてくれたのに、あまつさえそのレンタル自転車2台を前倒して返却するという、不恰好極まれりの僕らに対して、あろうことか若い店員さんは「ボスに確認してから返金するよ」と言ってくれた。なんていい人、いい店なのだろうか。ダウンタウン・バイクには感謝しかない。

かの素晴らしき自転車店に別れを告げ、北極圏へとドライブを始めたが、意外なことに左ハンドルである事、右側通行である事はほとんど気にならなかった。道幅も広く周囲の車の運転マナーも良好で、快調に北へと向かっていった。ただ日本と違うのはとにかく周りの車がデカイと言うことだ。GMCなどのアメ車で小型ボートを牽引しているヤツやらキャンピングカーの集団やらがたくさん走っていた。しかもそれらを運転しているのはハルクホーガンみたいなオッサンばかりではなく、キャメロンディアスみたいなそこそこ若い姉ちゃんドライバーも相当数いた。それなのに僕らはこんなちっこい車に乗ってるのが少しだけ恥ずかしくなった。次にアラスカに来る時は僕らもどデカイ車にしようと思った。

ハイウェイを走っていると、「サンダーバードフォール」という看板が目についた。気になるので行ってみようとなり、ハイウェイを降りた時にドリフト事件は起きた。僕はたいてい高速を降りるには長いループ状の道を進んでいくものだと思っていた。しかしアラスカはそうではなく、ハイウェイを降りると直ぐに一般道と直結しており、制限速度が一気に変わる仕組みなのだった。そんな事を全く知らない僕はまあ

まあスピードのままハイウェイを降りたので、降り口で急ブレーキを踏む羽目になり、結果としてドリフトしてしまった。恐らくタイヤ痕残っただろう。ウケるウケる。反省。

肝心のサンダーバードフォールはなんて事ない滝だったが、遊歩道の展望台の向こうで、男性がほとんど全裸で日向ぼっこをかましていたのは面白かった。あれはアメリカンジョークで済むのだろうか。まあ観光の女性たちも笑っていたのでいいのか。

途中でワシラのウォルマートに寄って、バナナやパン、オレンジジュースやぶどうを買い込んだ。暇潰し用に野球ボールも買った。店のポスターには「地域応援の為に5ドル分のアラスカ育ち食材を買おう！キャンペーン」的なことが書いてあった。地産地消ってどこでも大事なんやね。特に僻地であるアラスカはフードマイレージに対して、当然そういった意識も高まるのだろう。

そこからの道は多少辛いものだった。大きな道路工事が所々で行われていて、時折まさかの渋滞に巻き込まれた。その工事現場の横を通り過ぎる時は決まって「BUMP」という看板があって、ポコポコ地面のチンさむロードなのだ。車酔いに弱い人なら一発だろう。

その日はデナリ国立公園まで辿り着き、そのビジターセンター駐車場で車中泊することになった。風呂もないが、とりあえず着替えることにした。僕は一旦メガネを外してトランクルームの段差の所に置いた。そしたらノエルが気づかずに扉を閉め、高らかにバキッという音を立てて僕のメガネを粉碎した。ノエルは縮こまって謝っていたが、まあ僕が分かりづらい所に置いたので仕方ない。買ってまだ1ヶ月くらいだったのになあ。ただ壊れてから謝ったりなんとか直そうとする様子なんかは面白かったので、どうせならカメラが回ってる時に壊してほしかった。

文責：松本



SEPTEMBER.5/9月5日

数日前の野宿に比べたら車中泊は天国のようで、よく眠れた。ただ昨夜から天気が悪く、朝になってもマッキンリーは拝めなかった。昨日のウォルマートで買ったバナナやパンを朝食にして、フェアバンクスへと向かった。

まず僕は風呂に入りたかった。しかしフェアバンクスには銭湯がないので、プールに行くことにした。プールにはシャワーもあるだろうし、もしかしたら温水かもしれないからだ。高校の隣にあるスポーツセンターでプールだけの利用は可能かと尋ねると快くOKしてくれた。水着を持っていなかった僕には忘れ物の水着を貸してくれさえした。非常に親切。逆にノエルとすぐるは水着を持っていた。台湾で高い水着を買わされた奴らは、準備の意識が違うようだ。シャワーを浴びてプールに行くと、大小2つのプールに分かれていた。小さい方は老人たちがダラダラしていて、大きい方ははちびっ子と母親のグループが遊んでいた。大きい方のプールの泳ぐ部分にはだれもいなかったのが僕らの独占状態だった。ビニールボールなんかで遊んだり、ノエルはお得意の背泳ぎを披露したりなんかして楽しんだ。プールから上がり、シャワー室に行くと、インド系の老人がひとりいた。彼は積極的に話しかけてくれ、最後には握手までしてくれた。身長はそこまでではなかったが、手がすごく大きかった。移民であろう彼がこのアラスカの地でこの歳になるまで生き抜いてきた重みを感じるような、大きな掌だった。彼は僕らにどこまで行くのかと尋ねたのでコールドフットだと答えると、どんな緩りだと聞いてきた。フェアバンクス在住の彼も知らない町ということはいよいよ辺境なのだかと少し覚悟を新たにされた。インド綿の服がよく似合う老人だった。

その後近くのデニーズに入ったのだが、そこは世界最北の店舗だそうだ。日本のファミレスと違い少し高級感もあって、六本木のアウトバックと雰囲気は似ていた。ウェイターのお兄さんもかっこよかった。ただ、下げた皿の扱いが非常に雑で、よくこれで割れないかと皿の頑丈さに感心した。

フェアバンクスを出て北へ向かうといよいよ景色も変わってきた。背の高い木がめっきり減り、ツンドラと言うのだろうか、そういった植生になってきた。それより何より、遂に路面の舗装が途絶え、土の道になってしまったのだ。ただでさえアップダウンの激しい道なのに未舗装の道なんてそんな道を3時間程進んでいると、山の切れ目からキラリと川面が光るのが見えた。それがあのユーコン川だった。それまで特に盛り上がるポイントもなかったのに、尚のこと車内は盛り上がった。いざユーコンを渡る際、コンクリートの橋があるのだが、その表面は木製だった。木製にでもしないと、路面凍結が酷いのだろう。北国の苦勞が感じられた。その橋は川から

10数mの高さがあり、なかなかの絶景ポイントだった。渡ったところにある宿兼土産物屋兼レストランに車を止め、ユーコンの川辺に立った。水は石灰を含んだような灰褐色で、触れると流石に冷たかった。川幅も200m,300mはあろうかという雄大な流れで、どこまでも続いているようだった。駐車場には中国人の団体がいて、車のバッテリーと炊飯器を繋げて米を炊いていた。そろそろ日本食が恋しくなってきた僕らには羨ましかった。

そこからまた悪路を北へと進んでいった。事前の下調べによると、ユーコン川を過ぎてしばらくすると北緯66度33分、つまり北極圏に入るのだ。いつ突入するのか見逃さないように、時折持参したGPSを確認しながら、車を走らせた。北緯66度を越えたところから、助手席のノエルは秒読みのように緯度を連呼していった。その度に心が高鳴った。そして遂にGPSの画面が北緯66度33分を表示した。すると道に北極圏の看板はこちら、というような表示がありその方向に曲がると、駐車場のようなスペースの中に「Arctic Circle」という看板があった。ようやく北極圏に入ったかという感慨もあったが、看板の左右、すなわち北極圏の中と外を見比べてもあまり景色が変わらず、こんなもんかという気持ちもあった。ただ何れにしても北極圏に着いたのだ。看板の前で写真を撮らねば、と思っただが、8人程の中国系の中年男女が看板の前で代わる代わる写真を撮りまくっていたので、しばらく待つ事にした。暇なのと、せっかく北極圏に入った記念に、とりあえずワシラで買った野球ボールでキャッチボールした。奥の方では白人の父子がアメフトでキャッチボールをしていた。意外とキャッチボールスポットかもしれない。そうこうしていると看板が空いたので行くと、先の彼らが気を利かせて写真を撮ってくれると言った。彼らはすごくノリノリで僕らの立ち位置やら色々と指示してくれたり、すごく親切な人達だった。

看板を後にした後また走っていると、雨が降ってきた。未舗装の土むき出しの道はドロドロになり、道はとんでもなく長い坂道の連続だった。それにしても坂道の途中で1度スリップしかけたのは本当に恐ろしかった。とっさにエンブレを効かせてハンドルを真っ直ぐに固定するという教習所的なハイドロプレーニング現象への対処方をとりあえず行いなんとか切り抜けた。雨でこうなるのだから、冬になって雪が降ったり氷が張ったりしたらとてもじゃないけど無理だと思った。

朝出発してから10時間以上走ってきて、いつになったら着くんだという気がしてきた時、遂に最終目的地、コールドフットに辿り着いた。着いてまず最初に、その日の宿に空きがあるかの交渉をしに行った。旅では何より宿の確保が重要であることは身にしみて知っていた。それだけに部屋があった時はとにかく嬉しかったし安心

した。部屋はシングルベッドが2つだけだったので、それをくっつけて3人で寝る事にした。宿が確保できたらお腹が空いてきた。レストランに行くバイキングのような形式だった。ビーフストロガノフやバゲットやサラダをたらふく食べた。レストランでは長距離トラックの運転手をしているであろう屈強な男たちがそれぞれ話をしながら楽しそうに酒を飲んでいて、何回かお代わりをしていると、さっき北極圏の看板のところであった中国系のグループのうちの男性が一人入ってきた。他のメンバーは疲れて寝てしまったらしい。彼と食事しながらいろんな話をした。彼が上海で働いている事、日本の文化にもすごく詳しい事、彼のアラスカおすすめスポットなど、たくさん教えてくれた。話の細部が伝わらない時、レストランの紙ナプキンに漢字を書いて筆談できる事は意思疎通に非常に便利だった。彼は最後一人一瓶ビールを奢ってくれさせた。旅先での人との交流はやはり醍醐味である。レストランを後にしようとした時、日本語が聞こえてきた。日本人の家族のような一団がいたのだ。ただとにかく疲れて、酒に酔ってもいた僕らは話しかけもせず部屋に帰ってしまった。せっかくのチャンスを逃してしまったその点は後悔している。部屋に帰ろうと外へ出た時、曇り空の向こうに緑色のオーロラが微かに見えた。前日が車中泊だった事もありその日はベッドに倒れこんですぐ寝てしまった。しかし昼間の車内でたっぶり寝ていたすぐのだけは夜遅くまで起きてもっと綺麗なオーロラを見たい。しかもその時先ほどの日本人のおばちゃんともお話ししたそうだ。羨ましい限りである。

文責：松本

## SEPTEMBER.6 / 9月6日

僕が目覚めると、松本はまだ寝てたのだが、岡田の姿が見当たらない。僕と松本がベットを占領していたため、岡田はベットで寝れなかったようだ。しかし岡田は、夜の間オーロラ観察をしていたらしい。実は、昨日少しだけオーロラを見ることができたのであるが、もっとはつきりとしたものが深夜に現れたらいい。羨ましい。朝食をすませ、ガソリンを入れた。さすが、北極圏内である。ガソリンが高い。アラスカの他の都市の1.5倍くらいの価格であった。しかし、ここでガソリンを補給しないとフェアバンクスまで戻れない。背に腹は変えられないのであった。ひとまず、ユーコン川横にあるキャンプ場兼レストランを目標に出発した。途中、北極の荒涼とした大地に広がる自然の産物と思われる美しい岩岩を横目に車を走らせた。なかなかこの道路（ダルトンハイウェイ）が悪路なのであった。（ハイウェイとは名ばかり、舗装がほぼされていないのだ。）午後2時過ぎ、ユーコン川に差し掛かった。昼食をとった。おそらくユーコン川でとったと思われるサーモンを使った麺類をいただいた。セブンイレブンで売られているパスタの入ったサラダたる商品があるのだが、それに近い味がした。サーモンは薄い塩味で表面にこんがり焼き目がついており、なかなか美味しかった。

1時間近く休憩したのち、フェアバンクスに向け、車を再び走らせた。この調子なら、日が沈む前にフェアバンクスにつくことができる。順調だな、そう思った。次の瞬間、僕が座っている助手席側から焦げくさい臭いがしてきた。尋常ではない臭いだった。さらに、運転席の速度計周辺の異常事態を伝えるランプが点灯した。車内に緊張が走った。その状態で少し走行を進めると、明らかにタイヤに以上が発生していることが判明した。

「パンクだ。」車外に出て、タイヤを確認すると、凄まじくパンクしていた。原因は明白である。ダルトンハイウェイが想像以上の悪路であったのだ。とにかく、誰かの助けが必要だ。とっさにそう思った。携帯を見ると、もちろん圏外であった。車もほとんど通ってない。頭が真っ白になった。とりあえず、スペアタイヤを見つけだし、パンクしたタイヤと交換することとした。確かに、免許講習の時にスペアタイヤの付け替えについて教科書で一通り習ったことになっているが、いざとなると何もできなかった。「いや、終わったな」と本当に思った。自転車の盗難から始まり、極寒の中での野宿、そして北極での自動車のパンク、ここまでアラスカが厳しい場所であるとは想像してなかった。

”Are you okey”そう声をかけながら、一台の車が止まった。中にはいかつい男たちが3人乗っていた。僕たちのおかれた状況を説明すると、3人車から降りてきて、スペアタイヤを替えてくれたのだ。3人のうち、年長者と思われる方は元米国軍人で、日本の岩国ベースに勤務していたことがあるようで、僕たち日本人にとっても優しく接してくれた。運転席の以上事態を示すランプが消えた。助かった。本当に助かった。3人のヒーローは、タイヤを替えると、北極に旅立っていった。鹿の狩を行うようだ。僕たちもフェアバンクスへ向かうため、車を動かした。スペアタイヤのため、スピードが出せないの、ゆっくり進んだ。

午後8時過ぎ、なんとかフェアバンクス市街に到着した。翌日、タイヤを修理してもらうための「日産」の修理工場の場所を確認し、ホテルへ向かった。ようやく長い長い1日が終わった。アラスカにきて、1週間。1ヶ月以上いるような気分であった。明日は、岡田とお別れだ。フィンランドでゼミがあるようだ。この前、大学の講義でできた「グローバル化」という言葉が頭に浮かんだ。午後10時過ぎ床についた。

文責：小松

## SEPTEMBER.7 / 9月7日

朝6時。ホテルのビュッフェがスタートすると同時に我々は朝食を取った。二人は私が帰らねばならない時間に合わせて起きてくれた。実は、私はこの直後ゼミ合宿が控えており、フィンランドへ向かわねばならなかった為、彼らより一足早く、今日の夜までにAnchorageまで戻らねばならなかったのだ。7時頃、二人に別れを告げ、Fairbanks駅へ向かう。出発時刻は8時だ。これを逃すとまた明日まで待たねばならない。私は受付へ向かった。

恐ろしい事実が判明する。お金が足りないのだ。アラスカ鉄道は観光列車の為、値段は高めで、しかも買うのは当日券。かつ当初乗るはずでキャンセルした券の払い戻しがまだされていないのでお金が不足しており、自分のクレジットカードも何故か使えない。私は窮地に立たされた。あ、帰れないなこれ。と思っていたところ、受付の方が再び話しかけてきた。

なんと半額にしてくれるというのだ。半額になればなんとか鉄道には乗ることが出来る(財布には5ドルしか残らないが)。私は思いつきその方に感謝し、自転車を預け車両へ乗り込んだ。

その日は天気が良く、空は真っ青だった。巨大な窓を持つその車両は外の景色をそのまま体感するには十分で、乗客達はみな外の雄大な景色に酔いしれていた。私はというと、残った5ドルを無駄遣いするわけにもいかず、昼食はおろかコーヒーの一杯も買えずに、空腹を必死に押し殺していた。車中泊したDenali駅、Talkeetna駅、そして我々が一夜を共に過ごしたWasilla駅を真っ青なディーゼル車は颯爽と駆け抜けていく。誰もがワクワクしながら旅を楽しむ車内で、私は今までの出来事を回顧していた。

夕方、Anchorageに到着。驚いたことに、車で移動していた二人も予想外にスムーズに走り、同じくAnchorageに到着したと言う。空港でレンタカーを返却して、もし時間があるようであれば見送りに来てくれるというので、私は最後は何もかもがうまくいったことに心からほっとした。Downtown Bicycleに戻り、預けていた自転車を入れるための段ボールを受け取る。ペダおじが私を出迎えてくれた。Fairbanksまで着けたか、景色はどうだったか、とペダおじは話しかけて来てくれた。歓談した後、なんとペダおじがお店を閉めた後、車で空港まで送ってくれるという。しかも新しい段ボールまで用意してくれた。私は彼の優しさに感動し、お礼を述べて車に乗り込んだ。

空港では二人が待ってくれていた。「別れ際はハグだろう!？」とベダおじと偶然空港にいた彼の友人はにこやかに我々をからかう。度重なる事件で関係がすざんでいた我々は、嫌々ながらも信頼に満ちたハグをした。勿論、ベダおじともハグをしたのは言うまでも無い。

自転車を飛行機に載せる為のお金が不足していたので、私は二人から半ば強引に金を奪い借りた。自転車を預け、ドル札がピッタリ全て無くなり、野口英世くんが4人だけになった財布を持って、私は一人飛行機に乗り込んだ。向かうはフィンランドである。

文責：岡田

## SEPTEMBER.8 / 9月8日

午前11時、僕と松本はホテルを出発した。昨日フィンランドでのゼミがあるという日本に一時帰国した岡田をアラスカの玄関口であるアンカレッジ空港で見送った。お世話になった自転車屋のオーナーも見送りにきてくれた。今日は、その自転車屋のオーナーのご厚意に甘え、オーナーが主催している登山ツアーに参加することになっていた。僕らは、ホテルから近くのバス停まで歩いていた。今日もアラスカは晴れていた。そのためか朝から冷え込んでいた。僕はバス停までの道中、温まりたいとの一心でホットコーヒーと如何にも甘過ぎそうなパンを買った。このコーヒーであるが、アラスカのどのコンビニにも専用のマシンがおいてあり、アラスカの旅ではこのコーヒーが毎朝の定番と化していた。と言っても、コーヒーを飲むのは僕だけであったのだが。それはさておき、僕と松本はダウントウン行きのバスに乗り込んだ。アンカレッジの足はバスが最も適している。なぜなら1回の乗車につき2ドルで移動できるのだ。なかなか便利なものである。

20分後、バスはダウントウンのバスターミナルに到着した。そこから徒歩10分ほどにあるアラスカ自転車縦断の際にお世話になった自転車屋の前に着いた。そして、自転車のオーナーが快く迎え入れてくれた。ついに山に登るのかと、若干心の中で後悔している自分がここにいることに気づいた。数日前に行った自転車による数百kmに及ぶアラスカ荒野の縦断、レンタカーによる北極圏突入そして2000kmの走破の後に、なんと山に登ることになったのである。しかもその山は3000ftもあるというではないか。だが、松本は相変わらず元気そうである。そして自転車屋のオーナーも相変わらず大声で澆判としている。帰りたいとは言えなかった。

そんなこんなで、山の麓までオーナーの運転するバンに乗ってきてしまった。もう十分に景色は素晴らしいと内心思いながら、松本に連れられて登山口まで来てしまった。ただ意外にも登山道は整備され登りやすいと感じた。富士山の五台目から六合目へと向かうような景色に似ていた。植物の遷移においても共通するものがあるように感じた。さすがアラスカ、緯度が高い分、森林限界が早いなんて、いかにも生物学科らしい発想だと妄想に浸っていた。現を抜かすすると、ついにアラスカの大地と松本が牙を向け始めたのだ。アラスカの大地はなかなか険しい崖のような登山道を与えてきたのである。そして松本はその登山道を走り始めたのである。ただでさえ、疲れ果てている上でこの仕打ちである。完全に参ってしまった。

そんなことを心に思いながら、山頂への道を闊歩したのであった。山頂への最後の岩場は本当に崖のように急な斜面で、どこが登山道かわからない状況であった。僕

はなんとか松本の後をついていった。そして、ついに山頂へつくことができた。山頂には、星条旗が掲げられており、皆そこで記念撮影を行っていた。さすがアメリカである、軍人と思われる男たちやアメフトをやっているようなガタイの良い男たちが登頂を果たしたことを喜びオーバーにはしゃいでいる。なかなかアメリカナイズな光景だ。そして僕らも星条旗の前で各々のポーズを決めて写真撮影を行った。僕の場合は、写真の通り、なぜか片足をあげてしまった。

山頂は思ったよりも広く平らであった。おそらく野球場に匹敵するほどだったと記憶している。僕は、アンカレッジ市街を見下ろすことができる方角に腰をおろした。ようやくホッとすることができた。しかし、安楽の時間は東の間であった。というのも、松本がいつも携帯している野球ボールをカバンから取り出すのを遅く目撃してしまったのである。北極圏に突入した際もボールをいつものように取り出し、キャッチボールを始める男である。今回ばかりはまさかだと思ったが、アラスカの大地、しかも3000ftの山の上でついにキャッチボールを開始したのだ。恐ろしい、この言葉しか見つからなかった。

東の間の山頂での時間を過ごし、僕らは下山を始めた。帰りは思ったよりも順調に進んだ。下山途中には、ハングライダーの無事着陸を人生で初めて目撃した。下山後は、行きと同様にパンに乗り、ダウンタウンまで送ってもらった。ダウンタウンに到着後、早めの夕ご飯を済まし、市内のホテルに向かった。この日のホテルの前には綺麗な芝生が広がる公園があり、そこではラグビーの練習が行われていた。ただその公園には広く、十分なスペースがあった。ふと横を振り向くと、キャップを被り、野球ボールを持った松本が嬉しそうに公園の空いているスペースを見ている姿が目飛び込んできた。僕は、思わず背筋がゾッとした。この後のことは皆さんの想像にお任せしたい。

翌日には、各々アンカレッジ市街を観光し、夜シアトルへと旅だった。その後、シアトルにて数日間、骨休みをした。小松、松本が日本に帰国したのは日本時間14日であった。これにて、アラスカでの探検に終止符が打たれた。無事に日本に帰ることができた。多くの方がサポートと善意の上に成り立ったものであると感じた。

文責：小松

### 3.謝辞

このアラスカ自転車縦断計画の始動の際、相談に乗ってくださった横浜市立大学学務課学生担当の方々、この計画自体ヘインスピレーションを与えてくださった横浜市立大学探検部OBの方々や関東学生探検部連盟の役員の方々をはじめ、この計画に関与してくださった多くの方々に感謝申し上げます。

さらに、アラスカ道中にて、私共を助けてくださった、DOWNTOWN BICYCLE RENTAL Anchorage Alaskaの方々、コールドフットでお会いしたワン・シユウさん、本当にありがとうございました。

そしてこの計画を話し、快諾してくれた家族に感謝いたします。

最後に、この無茶苦茶な計画をともに作り上げた松本、岡田の両名にこの場を借りて、感謝申し上げます。

以上。

編集：小松伸栄瑠

平成三十年十二月十五日